

〈機能としての語り手〉から「第三項」論まで
— 魯迅『故郷』に対する田中実の解説 —

From “A Narrator as a Function” to “Third Term Theory”:
Minoru Tanaka’s Interpretations of LU Xun’s “Hometown”

呉 曉東 著
周 非 訳

by WU Xiaodong
Translated by ZHOU Fei

2015年はカフカの小説『変身』の発表百周年であり、いろいろな国でさまざまな形の記念活動が行われ、『変身』が持つ世界的影響力が証明されたのである。当時、私は複数の報道機関から寄稿文を發表するように請われたが、その時、私は魯迅のことを思い出した。魯迅の『狂人日記』や『阿Q正伝』の発表百周年の時に、同じように世界的な記念活動となり、熱狂が引き起こされることができののだろうか。

それで、2021年6月19日に行われた、日本の都留文科大学・特任准教授周非及び田中実名誉教授が企画した魯迅『故郷』発表百周年記念活動、『故郷』をめぐる日中共同シンポジウムに参加した時に、魯迅の日中両国に対する半世紀以上にわたる巨大な影響力を感じた。

私がこの『故郷』をめぐる日中共同シンポジウムに参加した直接の原因は、このシンポジウムにおける田中実の基調講演の元となる論文、『魯迅『故郷』の秘鑰——「鉄の部屋」の鍵は内にある扉は外から開く——」¹から深い感銘と啓発を受けたためである。この論文は、中国国内の魯迅研究に海外の研究を参照し、新しい問題空間を開拓する必要があると認識させたのである。

—

田中実『魯迅『故郷』の秘鑰——「鉄の部屋」の鍵は内にある扉は外から開く——』の中で、『故郷』は「時代の認識の枠組み、制度を超えたすこぶる奥の深い、謎を秘めた難解な作品だった」という基本的判断をしている。この原因は、魯迅が作中に置いた「言葉の仕組み・仕掛け」による。『故郷』の「奥の深い」扉を開く秘鑰も小説の「言葉の仕組み」の中にあるのである。

では、どのように『故郷』の「言葉の仕組み」の内部まで入り、小説の構造上の秘密を暴くことができるのだろうか。田中実は「〈機能としての語り手〉」という概念を作り、それによって、『故郷』の秘密を解いたのである。田中の文学研究方法論において、「〈機能としての語り手〉」は非常に解釈力のある概念だと考える。

田中は『故郷』を、一人称の語り手「私」が「聞き手」に向かって語った三つの出来事の場面（「帰郷の船の上」、「帰ってきた故郷の自宅」、「出郷の船の上」）から構成された物語として捉える。「一人称単数の〈語り手〉の「私」はそれぞれの時空に拘束されてしか語ることができません」と田中は述べ、『故郷』の中で語り手の「私」が「出来事の時間と共に移動して」いるので、「森鷗外の『舞姫』、夏目漱石の『坊っちゃん』、川端康成の『伊豆の踊子』」の中にあるような回想する主体がないという。田中が挙げたこの三つの日本近代小説とも、一人称の語り手が「自身の出来事を回想する主体であり、全体が回想形式になっていますから、自分がお話全体を振り返ってみることが出来る。言い換えれば、この三つの小説とも、一人称の回想的語りであり、語り手の「私」は過去の思い出を語っており、語り手と物語の間に時空の距離がある。それに対して、『故郷』の語り手「私」は自分が現在経験している最中の出来事を語っているようで、「私」が話を語っていないながら、「私」はその後、自分に何が起こるかを知」らないのである。

さらに突き詰めなければならないのは、この同時に進行する語り手のために、『故郷』の中には超越的な語り手が欠けているということだろうか。こここそ、田中の特異な判断が生まれるところである。『故郷』の中にもう一つ「作品全体を統括する」超越的な存在、即ち〈機能としての語り手〉が存在すると田中は考える。

（作品の全貌を：筆者注）知っているのはこの一人称の〈語り手〉の「私」を「私」と語り、〈語り〉全体を統括する〈語り手を超えるもの〉である〈機能としての語り手〉です。ここにこの作品の〈言葉の仕組み・仕掛け〉を読み解く糸口があります。

今まで、『故郷』のような一人称小説に関する論究は、通常「私」を「人物の私」と「語り手の私」、あるいは「経験する私」と「語り手の私」とに分けている。田中の理論貢献とは、この既存の分析モデルの中の「語り手の私」をさらに細分化し、そこから超越的な〈機能としての語り手〉を分離したことである。『故郷』の語り手も、田中論では生身の語り手と〈機能としての語り手〉に分けられ、「作品全体の言葉を統括しているのがこの〈語り手〉の「私」を「私」と対象化して語る〈機能としての語り手〉」だという。これは、『故郷』の主人公でもある語り手「私」のメタレベルで、より高次の存在が生成されたことを意味し、読者に「超越的」な角度からこの〈機能としての語り手〉を理解する理論的可能性を提供したのである。この理論は非常に詩的解釈力を持っており、第一人称叙述学におけるオリジナルな理論的開拓だと言える。

さらに重要なのは、〈機能としての語り手〉という概念が田中の使い方によって、確かに『故郷』理解における新たな空間を拓くことである。

ここでの一人称単数の〈語り手〉の「私」のまなざしは物語空間に組み込まれ、拘束されているため、その対象人物の閨土や楊おぼさんの心の内側は見えませんが、語れません。これが物語のメタレベルに立ち、「私」とその対象人物のまなざしを統括する〈機能としての語り手〉であれば、そこから免れます。〈機能としての語り手〉は〈語り手〉の「私」自身の意識のみならずその無意識も、また閨土や楊おぼさんの内奥も

対象化が可能です。

もし我々がこの〈機能としての語り手〉のまなざしから、新たに閩土の人物像を考えれば、本当に田中の言うように、語り手の「私」に生じた「悲しむべき厚い壁が、ふたりの間を距ててしまった」という感慨を超えて閩土の心の深いところに入ることができるのだろうか。この問題に対して、田中は詳しい作品分析をもって、説得力のある答えを出した。

〈語り手〉の「私」には黙々と煙草を吸っている閩土がデクノボーにしか見えませんが、〈機能としての語り手〉の視点から見ると閩土の心の内は大違いでした。実は、閩土もまた、「私」の母親からの手紙で「私」に会えると知り、「うれしくてたまりませんでした。」と心の内を見せていました。訪ねて来た時は、「青豆の乾したのですが、自分とこのですから、どうか旦那さまに…」と差し出して礼を尽くしています。何より、再会の九日後、「私」たち一家の見送りの際、水生の代わりに六番目の五歳の女の子を連れて来るという配慮を見せています。水生と宏児とが自分達のように親しくなると別れが辛くならないようにという配慮、ここには閩土の子どもたちへの深い愛情、人間性が窺えます。こうした閩土の内面は「私」のまなざしからは見えません。そのため、読み手もこれを読まないのです。これは一人称の〈語り手〉の「私」の視点からのみ読む、すなわちプロットだけを読むと見えませんが、〈機能としての語り手〉によって閩土の内側からも語られていることを対象化して読む、すなわち〈メタプロット〉を読めば、自ずと事態は見えてきます。

『故郷』の〈言葉の仕組み・仕掛け〉は、この超越性を持つ、隠れている〈機能としての語り手〉の存在に現れている。この〈機能としての語り手〉によって、読者の分析と解釈が小説の表層を超えて「メタプロット」に至り、田中が推奨し実践している、文学研究における「深層批評」が生成されるのである。それに、前掲作品分析の引用文から、筆者は、田中が同情心のある理想的な読者だと感じた。だからこそ、閩土をただの、語り手の「私」に観察され、批判される啓蒙対象として捉えるのではなく、閩土の内面世界にあればほど同感できたのであろう。このような同情と理解は、人物の内面世界に入る手助けだけではなく、小説に内在する〈言葉の仕組み〉を実際、体感することにも役立つのである。

二

『故郷』に対する田中の解読過程では、田中自身が提起した「第三項」論が使われ、論証されたのである。「第三項」論における田中の系統的思考は、『故郷』理解に対して啓発的だけではなく、同時に文学認知と文学作品の読みの実践の原理を提供したのである。田中論の補説の中で、田中は「第三項」論をこのようにまとめている。

わたくしは我々の主体が実際に知覚し、捉えることのできる客体の対象の領域を〈わたしのなかの他者〉と呼びました。他方、その主客相関の外部である客体の対象それ自体、そのものの領域を〈第三項〉、了解不能の《他者》と呼んで両者を峻別してき

ました。人が主体の捉えている客体の対象と関わって生きている限り、その外部である客体そのものに向かうことはできないからです。これと向き合うには、主客相関の枠組みを相対化するレベルのさらにメタレベルに立つことが必要です。そこで我々は主体の及ばぬ了解不能の《他者》の領域と向き合うこととなります。わたくしは四半世紀、こうした思考図式で拙論を論じてきました。

田中の「第三項」論は、非常に解釈力のある文学認識論であり、「思考図式」と解釈図式でもある。この理論は、主体の認知の限度に対する自覚に基づくのである。主体が観察し認識できる対象を、田中は「私の中の他者」だと考える。この考えとは、主体が自主的に認知しているように見えながら、実はその認知過程はあくまでも主体と客体の自己同一化、それどころか同意反復である可能性が十分あるということである。常に主体には捉えられない領域、「《了解不能の他者》」が存在する、これが田中のいう「第三項」である。もし本当に正面から「《了解不能の他者》」の領域に向き合おうとすれば、「主客相関の枠組みの外部、そのメタレベルに立つ」必要があるのである。これはある意味では、魯迅が以前話した「自分の手で自分の髪を引っぱって地球から離脱しようとするもの」²に似ている。メタレベルの認知を創建するのは、ロジック上では簡単だが、実践は極めて難しいことを意味するのである。しかし、田中の「第三項」論は少なくとも、理論上における超越の可能性を約束した。だから、「第三項」は「思考図式」により近い。この「第三項」論は直接田中の『故郷』解釈図式に影響し、別の言い方でいうと、田中の『故郷』論における創造的な解釈は、「第三項」論を論証したのである。田中が『故郷』から〈機能としての語り手〉を分離させるのは、正しく、多分魯迅自身も感知していない「奥の深い」思想と認知の暗黒領域、即ち「第三項」を探ろうとするためであろう。

この超越的な〈機能としての語り手〉が読者を小説の「メタプロット」、深層構造に至らせ、田中が提起した「第三項」、「《了解不能の他者》」の領域に繋がせたのである。〈機能としての語り手〉の概念は、小説の語り手に対する理解をより複雑にしたのである。全ての小説の中には〈機能としての語り手〉の「機能」があるのではなく、「第三項」の不可知の深層意味が内包される時だけ、超越的な〈機能としての語り手〉が生成されるのである、魯迅のいくつかの一人称小説、特に『故郷』は、このような〈機能としての語り手〉を内蔵しているのである。田中のこの〈機能としての語り手〉の発見は、『故郷』の「メタプロット」を洞察する手助けになったのである。

日常生活の基盤となるリアリズムの場と、リアリズムの外にあって了解不能の《他者》と向き合う永劫の沈黙の場、この二つの座標軸を持ち、近代小説の神髄へと向かうのです。

「近代小説の神髄」とは、近代小説に内包される、人類の制度から精神へ、さらに無意識領域まで至るいろんな形での近代主義的な深層構造であろう。田中の提唱してきた「深層批評」でしか、この「深層構造」を洞察できないのだ。田中は、『故郷』の中に一種の〈言葉の仕組み・仕掛け〉が内包されていると考えるが、このような「深層構造」は、「第三項」論によって初めて捉えられる。田中はこのような問題を理解するには「世界観認識を転換

する〈第三項〉の原理論の問題に触れる必要がある」というが、これも一種の夫子自道であろう。

三

田中論のもっと啓発的なところは、『故郷』を、五四運動の時期における魯迅の「鉄の部屋」に関する思想総体の精神延長線において論じ、「鉄の部屋」を破る可能性、小説における魯迅の「希望」の主題に関する解決方法、『故郷』の「時代の認識の枠組み、思考の制度を超えた」超越性を論証し、その上で「この作品はこの世界観認識転換の鍵を渡してくれる」と論じたところである。これは、『故郷』の豊饒性、超越性、重要性に対する頗る発明的な洞見である。

例えば、田中は論文の結末部で『故郷』における希望の話題を新たに解釈し、どのように「鉄の部屋」を壊すかに関する特異な思考を引き出したのである。

ここで魯迅作品の最も有名な結末とも言える下記の文章を再び思い出してみよう。

まどろみかけた私の眼に、海辺の広い緑の砂地がうかんでくる。その上の紺碧の空には、金色の丸い月がかかっている。思うに希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないものともいえない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。

魯迅は、一方で「希望」の有無の問題を鍵括弧付きの現象学みたいに棚上げし（即ち「もともとあるものともいえぬし、ないものともいえない」）、もう一方では、「地上の道のようなものである」と比喩し、読者に希望があるような幻想を与えるのである。しかし、「希望」が「地上の道のようなもの」で確実にあるというのは、本当に魯迅の言いたいことだろうか。この問題について、田中はこのように分析する。

「道」をもし「希望」と言い換えるなら、その「希望」の意味するところは、これまでの主客相関の枠組のメタレベルで捉えていた主体から発せられた「希望」ではありません。「希望」は「絶望」に相等しいという認識の図式ではなく、これを超えて、その外部にあるメタレベルの主体が発した「希望」です。多くの人が歩くか歩かぬか、その結果の「希望」は「私」のあずかり知らぬことです。人々が多く歩くなら、「希望」が生まれると言うのは、それまでの主体の願望や意志の及ばぬ境地に立って、これまでの世界観認識から脱却し、その外部、了解不能の領域と向き合っているのです。ここではじめて、生身の〈語り手〉「私」は文字通りの希代の認識者として完成し、「鉄の部屋」に立ち向かうことになります。その時、「鉄の部屋」を開ける鍵は内側にあって、扉は外からしか開かないのです。〈語り手〉と〈機能としての語り手〉が重なる地平です。こうして『故郷』の〈ことばの仕組み・仕掛け〉は完結します。

この論述の素晴らしいところは、魯迅がもう希望の有無の問題の解決を主体の認知の内部に限定せず、主体の外部に求めるということである。即ち、「多くの人が歩くか歩かぬか、

その結果の「希望」は「私」の「あずかり知らぬこと」である。田中論のタイトル『魯迅『故郷』の秘鑰——「鉄の部屋」の鍵は内にあるって扉は外から開く——』から既に分かるように、田中は『故郷』の中に「鉄の部屋」の扉を開く秘鑰が隠されていると考える。この扉が最終的に「外から開く」という結論は、『故郷』の結末「歩く人が多くなれば、それが道になるのだ」からヒントをうけ、そこから演繹したのであろう。

しかし、我々はやはり、「結局誰が外から「鉄の部屋」の扉を開くか」を聞かざるを得ない。田中は補説の中で、「ここまでが人間のできる限界、扉の内の鍵を自ら外すことです。扉の外はもはや人の手に余る領域です。鍵は内側にあるって、扉は外から開くのです」と言う。

「鍵は内側にあるって、扉は外から開く」をタイトルにするという考えは絶妙であり、私たちに「鉄の部屋」を破ることを考えさせ、魯迅式暗闇の扉を開く新しい発想へと啓発するのである。「鉄の部屋」の中にいる人が内側にある鍵を開けることができるが、自分でこの扉を開くことができず、扉の外に行けないと、なぜ田中は考えるのだろうか。それは、「扉の外はもはや人の手に余る領域」だと田中は考え、不可知論的な、玄学（老荘の学などの幽玄な学問：訳者注）的な解決法を出したのである。この考えは、「近代小説の神髓」を「《了解不能の他者》と向き合う永劫の沈黙の場」だとする田中の考えと同工異曲であり、田中の「第三項」論の元にあるのである。ただ、中国人から見ると、このような理解は魯迅の精神世界を玄学的に解釈したことになるのである。例えば、竹内好の「無」によって魯迅を理解しようとする同じことと同じである。竹内好は、「魯迅の文学は、根源的というと、「無」のようなものである」³と言ったことがあるが、これは同じく玄学的な理解である。

田中の言う「扉は外から開く」は、確かに「鉄の部屋」を壊す新しい構想を提供した。しかし、もう一方では、もし「扉は外から開く」がただ「人の手に余る領域」に留まるのであれば、中国人は永遠に暗闇の扉が開けず、永遠に「鉄の部屋」の中で昏睡する民族的宿命に陥るままになるかもしれない。

田中の出発点に即して考えると、「扉は外から開く」問題のもう一つの解決法があるかもしれない。「鉄の部屋」の扉を開く可能性は「人の手に余る領域」にあるのではなく、逆に民衆（知識人も含め）の社会实践によって構成された歴史領域の中にあると言えないのだろうか。

『呐喊』自序の中の、自分を語る五四時代の魯迅は、確かに痛ましい歴史的仲介人意識を背負っていた。「自分が因襲の重荷をにない、真っ暗な水門の内側から扉を肩で押しあけて」、若い人たちを「広い、光のある場所に出してやる」⁴と。それと同時に、『野草』の中の多くの文章は、自己犠牲に対する懐疑、啓蒙主義の歴史的限界に対する思考を表し、暗黒の扉の外へ逃げ出す未来の遠景に対するある種の希望を垣間見せているようである⁵。

田中が考える「扉の外はもはや人の手に余る領域です。鍵は内側にあるって、扉は外から開くのです」という形而上的思考図式は魅力的な一面を持っているが、魯迅本人にしても、近代中国の社会進行にしても、その内在的ロジックの中に「鉄の部屋」を破り、暗黒の扉の外へ歩みだす歴史憧憬が含まれている。⁶

『故郷』を書いた時の魯迅は依然として「鉄の部屋」を壊す自信を持っていない。あるいは田中のいうように「希望を持っていない」。しかしもう一方では、田中のいうように、「〔『呐喊』：筆者注）「自序」の「私」も『故郷』の「私」も永久革命を強いられ続けるの

です。人が何事か、己れの全身全霊、すべてを掛けて事を成そうとするには、必要条件しか持っていません。十分条件はその人の生の枠組、主客相関の枠組の外に」あるのだ。

魯迅は上海での最後の十年間に、どのように「人の生の枠組み、主客相関の枠組みの外」から「鉄の部屋」を壊し、暗黒の扉を外すかを、集中的に考えたのかもしれない。当然、この民族性と歴史性を兼ねる仕事は魯迅一人では完成できない。そのため、魯迅の思考主体が外力の可能性を探し求めるようになったのである。その外力とは民衆の主体であり、社会運動であり、歴史の意志である。『故郷』の中の「私」が希望を次の世代及び歴史における民衆の実践（即ち「歩く人が多くなれば、それが道になるのだ」）に託し、他者の中に自我が見つかる可能性を示している。これこそ、筆者が田中論の結末部から受けた啓発である。我々に、どのように知識人の歴史的主体性と可能性の起動力を新たに探し求めるかのヒントを与えたのである。田中実是我々に、『故郷』の結末部に既に群集性的社会革命に対する魯迅の関心が示されており、「鉄の部屋」を壊す歴史的可能性があることを教えてくれた。

田中実のいうように、「鉄の部屋」を壊す秘密は「鍵は内側にあって、扉は外から開く」。魯迅の『故郷』は「世界観認識の転換の鍵を渡してくれる」のである。魯迅は内側から鍵を見つけただけでなく、同時に外部から暗黒の扉を開く努力をしていた。恐らく、これこそ「世界観認識の転換」の根源的形を構成するのであろう。所謂「外部」こそ、魯迅式反省型知識人が歴史的主体性を獲得する究極的な根拠であろう。

注

- 1 『都留文科大学研究紀要』第93集（2021年3月 都留文科大学）。
- 2 魯迅「「第三種人」について」（『魯迅文集』5 竹内好訳 ちくま文庫 1991年7月）
- 3 竹内好『魯迅』（講談社 1994年9月）
- 4 魯迅「子の父としていま何をするか」（『魯迅文集』3 竹内好訳 ちくま文庫 1991年5月）
- 5 拙稿「「空」から「無」まで—魯迅の生命哲学及び自我超越—」『粵港澳大湾区文学評論』2021年第4号
- 6 2021年5月7日に中国・復旦大学で行われたシンポジウム「夏氏書簡と海外中国文学研究」において、王徳威先生が基調講演「「暗黒の扉」からの脱出—夏済安、夏志清と中国近代文学—」を行った。その中の「「暗黒の扉」からの脱出」という考えは、魯迅理解に関する新たな発想を提供し、魯迅には別の歴史的選択があったこと、「暗黒の扉」から脱出する可能性を考えさせてくれた。

【訳者解題】

本稿は北京大学中国文学科教授・呉曉東氏が中国の学術雑誌『魯迅研究月刊』2021年第9号に発表した論文の日本語訳である。

著者の呉曉東氏は、中国現代文学研究会副会長でもあり、中国の近代文学研究を牽引している中心人物である。著書には、『文学性的運命』(広東人民出版社 2014年)、『カフカからクンデラまで—20世紀の小説家と小説』(三聯書店 2003年) など多数ある。

この呉氏の論文は、日本近代文学研究者田中実氏が2021年3月に発表した論文「魯迅『故郷』の秘鑰—「鉄の部屋」の鍵は内にあるって扉は外から開く—」(『都留文科大学研究紀要』第93集) に対する考察である。(田中『故郷』論の中国語訳(周非訳)は、中国の学術雑誌『日本語教育と日本研究』第18号(華東理工大学出版社 2022年5月)に掲載された。) この論文は、田中論に書かれた「機能としての語り手」から田中氏が提起した「第三項」論までを分析し、田中氏の『故郷』論の画期的な意味を説明しただけではなく、「第三項」論の原理論と方法論が文学研究において新しい世界を拓いてくれることを論証したのである。この論文によって、多くの中国文学研究者たちが「第三項」論の原理論・方法論を知り、中国の魯迅文学研究界乃至中国近代文学研究界は強い衝撃を受けた。

呉氏はこの論文が発表された後の2022年2月16日に、田中氏とオンラインで公開対談をし、さらにこの論文に書かれた問題を追究した。対談において、呉氏は、2022年3月に発表された田中氏の論文「近代小説の《神髓》—「表層批評」から〈深層批評〉へ—」(『都留文科大学紀要』第95集) を基に、「第三項」論及び『故郷』の〈読み〉の問題をめぐって田中氏に六つの質問をした。(対談のために、この田中論文が正式に発表される前に、呉氏には、筆者によるその論文の中国語訳を渡していた。) 六つの質問及び田中氏の回答の概要については「付記」で紹介するが、呉氏と田中氏の問答から、田中氏の『故郷』論の奥深さ及び理論体系としての「第三項」論の厳密さを垣間見ることができる。

【訳者付記】

以下に、前述した対談における、呉氏の質問と田中氏の回答の概要をまとめておく。呉氏の質問概要は、呉氏が中国語で書かれた対談発言原稿に従って周非が翻訳したものであり、田中氏の回答概要は、対談における田中氏の発言の要点のまとめである。

1、〈機能としての語り手〉について

呉氏の質問概要：田中先生は〈機能としての語り手〉の範疇を発明し、〈機能としての語り手〉の仲介によって、『故郷』の中に隠されている秘密を解いた。この〈機能としての語り手〉をどのように本文中から見つけるのか。〈機能としての語り手〉は、小説中に痕跡があるのか。〈機能としての語り手〉がどのように生成されるのか。〈機能としての語り手〉は本文内の固有の緯度を持つ存在物だろうか。どの小説にも、〈機能としての語り手〉があるのか。

田中氏の回答概要：三人称小説の場合なら、読者は語っている主体をすぐに想定できる。一人称小説の場合は、生身の語り手は登場するが、〈機能としての語り手〉は表には表れてこない。〈機能としての語り手〉には実体がなく、「機能」である。力学として働いている。〈機能としての語り手〉があるかないかではなく、読者が読みとったものを相対化で

きるかどうか、〈機能としての語り手〉を読みとろうとするかどうかの問題である。

小説の中に、特に〈機能としての語り手〉を読まなければ読めない作品と〈機能としての語り手〉を措定しなくても読める作品の両方があると考える。『故郷』の場合は、特に〈機能としての語り手〉が必要である。

2、「鉄の部屋」について

呉氏の質問概要：田中先生の論文の中で、さらに啓示性のあるところは、『故郷』を五・四運動時期の魯迅の「鉄の部屋」の思想総体の精神延長線上において考えたことである。田中先生は「鉄の部屋」の鍵が内にあり、扉が外から開くと考える。この考え方は玄学的だと感じるが、「鉄の部屋」の扉をどのように外から開くのだろうか。

田中氏の回答概要：『故郷』は一種のミラクルだと考える。「鉄の部屋」の扉は「外部」からしか開かず、「外部」は「私」のあずかり知らぬ領域であるが、その「外部」を語っているのは「私」である。作品の末尾で「私」は〈機能としての語り手〉の問題のところに辿り着いた。「私」のすべてのイデオロギーが粉碎されて、「私」は「私」を超える「外部」に出会う。つまり、あまたの「閨土」、底辺の民衆たちが歩けば「希望」があると語っている。読者がそこに踏み込むか踏み込まないかにかかっていると考える。但し、「鉄の部屋」の扉は一回開けても、まだ次の扉が現れて来る。この問題は歴史的経緯の中で考えなければならない。

竹内好は『故郷』の表層しか捉えていないために、「二十年・三十年」のミスの意味を理解できなかった。「第三項」論は、竹内好のいう「無」ではない。どちらかというところ、禪の世界でいう「空」に近い。「第三項」の領域は、人間には永遠に捉えられない領域であり、ニヒリズムとは無縁の世界である。

3、〈読み〉の原理論について

呉氏の質問概要：田中先生の〈読み〉の原理論は、以下の三者を区別している。一つは、客体の文章の文字の羅列である元の文章、もう一つは、読者内部に生成される「パーソナルセンテンス」、三つ目は「パーソナルセンテンス」の外部の「オリジナルセンテンス」です。しかし、「オリジナルセンテンス」の存在を措定すると、再び本質主義的な実体論に戻るのではないだろうか。

田中氏の回答概要：文学作品の文章は読書行為によって現象する。その現象のメカニズムを理解するために、「元の文章」、「パーソナルセンテンス」、「オリジナルセンテンス」の概念が必要である。客体の文章そのものは永遠に捉えられないので、「オリジナルセンテンス」は想定できるだけである。実体としてあるのはインクの跡でしかなく、そこには還元できない。

4、作品における「背理」について

呉氏の質問概要：田中先生が最新論文（前掲2022年3月の田中論文：訳者注）の中で、「近代小説の《神髓》に値する傑作とは、往々にしてその無意識のさらに底の完璧な外部である「向こう」を問題にしています。そこは主体の「私」を超えた反「私」という逆説の不条理を生きる場でもあります。」と書いている。これで、深層読解は、本文の深層における無意識を掘り起こすだけで満足するのではなく、田中先生がいう「第三項」に到達する。

これは、フロイト主義の読みを超えて、背理を核心的形式とする主体論を構築し、同時に、文学作品の背理性を、本体論的意義を持つ存在物として確立した。背理（パラドックス）に関する田中先生の判断は、最新論文における『故郷』末尾の希望の有無に関する解釈の中で、完璧な頂点に至った。田中先生は、以下のように考える。

矛盾の根源が露わになったのです。「私」はそれまでの知識人としての自己像、認識者の相対主義的世界観をその根底から放擲せざるを得なくなったのです。「私」は「私」の外部に立った、すなわち、「私」は「私」の反「私」と化したのです。

背理の判断自体は深いですが、読解の終点では、背理を超える必要があるのではないだろうか。背理は超えられるのだろうか。

田中氏の回答概要：パラドックスの問題を抱えながら、それを超え続けていく力学が魯迅の文学だというふうを考える。超えられるかどうかではなく、超え続けていくことが、魯迅が『故郷』の中に書いた問題であり、毛沢東が進んできたプロセス、歴史的経緯だと考える。

5、歴史性と「第三項」論の相関について

呉氏の質問概要：田中先生が最新論文（前掲2022年3月の田中論文：訳者注）の中で『故郷』の作品外のこと、毛沢東が湖南第一師範学校附属小学校の教師をしていた時代に、生徒たちに『故郷』を暗記させ、書き写させたことに触れた部分がとてもいいと、私は思う。

歴史性は本文の深層読解にとっては重要だろうか。田中先生の「第三項」論はある種の共時的理論に見えるが、この理論にある種の歴史性を導入する必要性と可能性がないだろうか。言い換えると、歴史的緯度は本文の深層読解にとっては重要だろうか。

田中氏の回答概要：歴史は人間と別にあるわけではない。「第三項」論は、生身の読み手に起こった出来事を基本としているので、常に歴史的経緯の中にしかない。歴史的経緯といった時の所謂「現実」、「客観的現実」の問題をどう考えたらいいかを「第三項」論は考えている。

6、魯迅文学について

呉氏の質問概要：田中先生は日本文学の研究者だが、魯迅の作品についても深く研究されている。日本の作家と比べると、魯迅文学の特性とは何であるか、欠点は何であるかを教えていただければと思う。

田中氏の回答概要：文学作品にはそれぞれの特性がある。それぞれの良さをどう評価するかは大事だと考える。魯迅文学については、私の読んだ限りでは、一種のミラクルを実現していると思う。勿論、魯迅だけではなく、日本の作家たち、例えば森鷗外、夏目漱石などもミラクルを実現している。読み手がそれぞれの作品の良さを引き出せるかどうかは、作品を読むときに大事である。

〈機能としての語り手〉から「第三項」論まで

Received : April, 27, 2022

Accepted : June, 8, 2022

